

第4章 平成4年度山口大学構内の試掘調査

第1節 工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

常盤構内の西端、電子工学棟の西側の空き地にプレハブ研究・実験棟の新営が計画された。常盤構内では過去10度にわたる試掘、立会調査が行われてきたが、顕著な遺構・遺物は検出されていない。しかし、調査は断片的で常盤構内の埋蔵文化財の有無を把握したとはいえ、地下への掘削には慎重な対応が必要とされる。埋蔵文化財資料館運営委員会は、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査の必要があると判断した。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、7月13日に試掘調査を実施した。新営予定建物の範囲に従い東西32.0m×南北6.5mの四隅に1m×1m、南長辺の中央に2m×1mと、計5カ所のトレンチを設定した。調査総面積は約6㎡である。

2 層位

Aトレンチ 標高30.37mの現地表の下には厚さ約30cmのバラス層があり、その下に工学部造成時の山土による埋め土が厚さ約20cmにわたって堆積している。埋め土の下には、厚さ約20cm瓦礫層があり、その下の宇部工業専門学校の校舎コンクリート基礎へと続く。コンクリート基礎はその上面で標高が29.6mである。

Bトレンチ Aトレンチの南側6.5mに設定したため、Aトレンチとほぼ同じ層序であった。現地表は標高30.24mとAトレンチよりやや低いが、同じく標高29.6mでコンクリート基礎の上面を検出した。

Cトレンチ 標高30.16mの現地表の下には、厚さ約20cmのバラス層があり、その下に工学部造成時の山土による埋め土が厚さ10~20cmにわたって堆積している。埋め土の下には、宇部工業専門学校の旧表土と思われる暗赤褐色粘質土(5YR 5/8)が、明赤黄色粘質土(5YR 7/8)の地山上面に2cmほど堆積している。地山検出面の標高は、東側

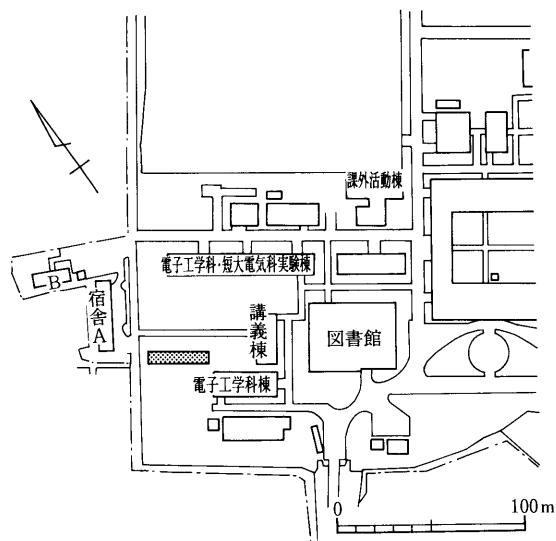


Fig. 51 調査区位置図

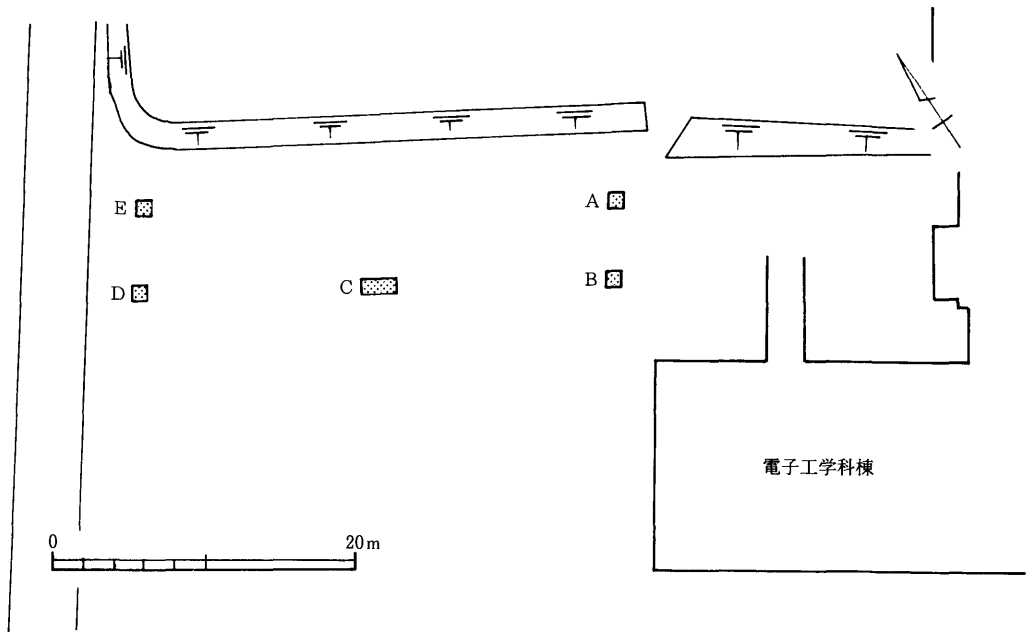


Fig. 52 トレンチ設定図

で約29.76m、西側で29.83mと西側がやや高くなる。

Dトレンチ 現地表面の標高は東側で30.09m、西側で30.2mと西側がやや高い。地山までの土層堆積にバラスおよび埋め土は認められず、黒褐色粘質土(5YR 3/1)による厚さ約20cmの表土層の下は、すぐに宇部工業専門学校時代の旧表土である。旧表土層は暗赤褐色粘質土(5YR 5/8)で、約2~10cmほどの厚さがあり、その下はCトレンチとおなじく明赤黄色粘質土(5YR 7/8)の地山である。地山検出面の標高は29.8mである。

Eトレンチ 現地表面の標高は東側で30.1m、西側で30.21mと西側がやや高い。Dトレンチの北側6.5mに設定したため、Dトレンチとほぼ同じ層序であった。ただし、表土層や旧表土層は薄い。地山検出面の標高は、東側30.0m、西側30.1mである。

3 小結

各トレンチにおいて遺構・遺物の検出はなかった。A・Bトレンチから宇部工業専門学校校舎のコンクリート基礎を検出したことが示すように、本調査区は過去に大規模な造成を受けている。このことは、建物基礎が検出されなかった、C・D・Eトレンチでの宇部工業専門学校の旧表土直下が地山という状況からも明らかである。しかし、遺構・遺物が本来なかったと確定できる材料は未だ少なく、データ蓄積のために今後も調査を継続する必要がある。

第2節 工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営その他工事に伴う試掘調査

1 調査の経過

常盤構内の中央東側、建設工学科実験研究棟の北側のグラウンドに研究・実験棟の新営が計画された。予定地の西側を走る道路は一段低く切り通されており、その断面より地下の状況はある程度まで推測が可能であった。切り通しの断面には、地表よりわずかな深さで蛇紋岩の岩盤が露出しており、予定地内がかなりの削平を受けていることは予測できた。しかし、常盤構内において東側の調査例はなく、また研究・実験棟の工事面積は約3,490㎡の大規模なものであった。埋蔵文化財資料館運営委員会は、予定地内の埋蔵文化財の有無を把握するための試掘調査が必要と判断した。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、7月23日に試掘調査を実施した。新営予定建物（東西52.0m×南北16.0m）の四隅と両長辺の中間点、分棟（南北25.0m×東西15.0m）の四隅の計10カ所に2m×2mのトレンチを設定して行った。調査総面積は約40㎡である。

2 層位

本調査地の現状は、グラウンドとして活用されており、標高約31.8mを測る広い平坦地である。グラウンドに使用するため、マサ土（7.5YR 8/4）が厚さ約10cmほど客土されて表土層となっている。この表土層の直下の土層は、Aトレンチで厚さ約10cmの暗褐色粘質土（10YR 4/4）による埋め土を検出した。他は、いずれのトレンチも蛇紋岩の岩盤（7.5YR 8/8）か、地山の明黄褐色粘質土層（10YR 7/6）であった。岩盤及び地山の検出面は、標高約31.7mである。

なお、B・Eトレンチ、同じくC・Fトレンチを貫いて南北に走るグラウンド排水用の石詰め暗渠を、表土層から掘り込まれた土層状況で検出している。この暗渠の底は、地山にまで達しており、深さは約20cmである。

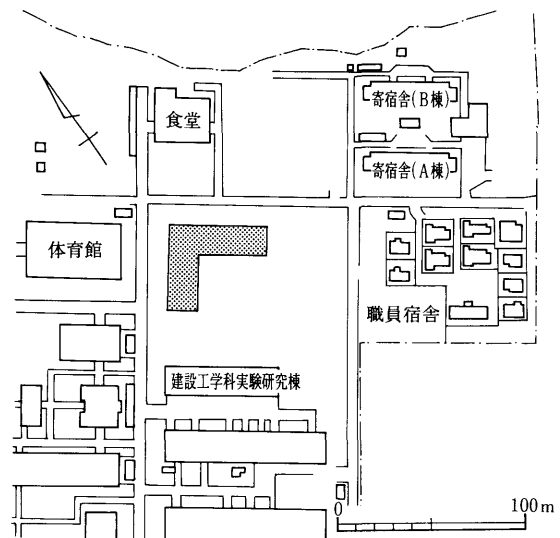


Fig. 53 調査区位置図

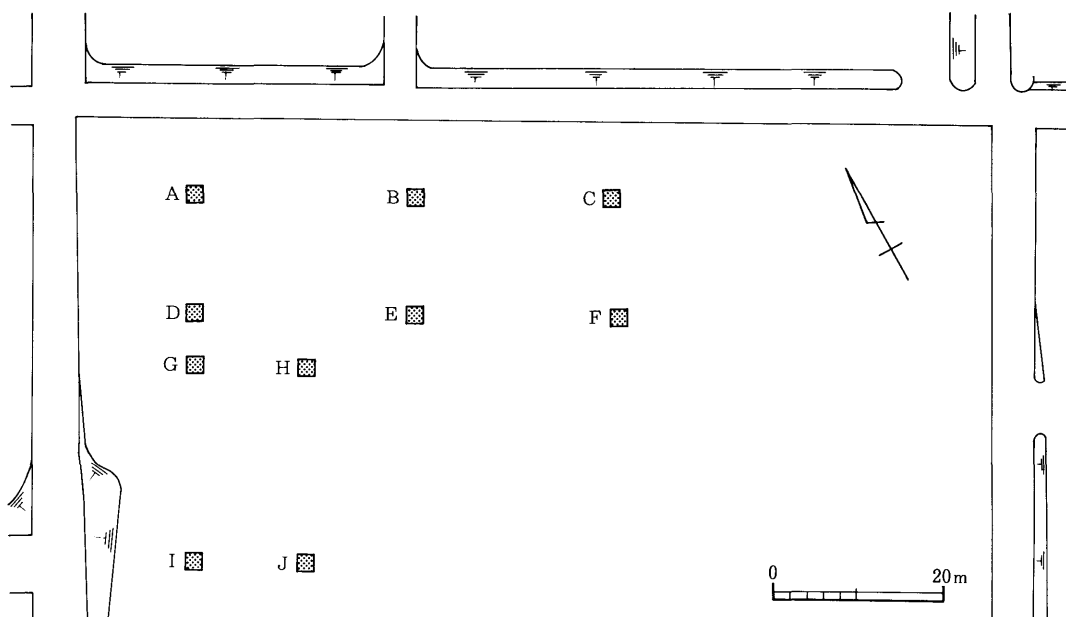


Fig. 54 トレンチ設定図

3 小結

各トレンチにおいて遺構・遺物の検出はなかった。調査前に予測されたように、本調査地の削平は著しいものであった。表土層の直下は蛇紋岩の岩盤あるいは明黄褐色粘質土の地山であり、後世の堆積物は一切検出できなかった。

常盤構内は、東から西に延びる洪積台地上に位置している。構内の平坦地は、この洪積台地を削り取ることによって造成されている。また、侵食谷部分であった西側の運動場は、構内の高所を削り取った土砂で埋め立てられたものである。このように現状での常盤構内の平坦地は、相当手が加わっているものと見なさなければならない。今回の調査区である建設工学科実験研究棟の北側グラウンドもその例外ではなかった。

建設工学科実験研究棟の北側グラウンドは、北から南に向かって4段にわたって造成された構内平坦地の下から3段目の高所に位置する。今年度おこなった工学部及び工業短期大学部職員宿舎の立会調査も同じく下から3段目の平坦地であったが、後世の堆積物は一切検出できなかった。これらの調査結果は、本調査区の周辺が大規模な削平を受けていることを明らかにした。